

平成三十年度 国際教養学部 一般入試 (後期日程)

問一 「遠足にゼツコウの天気だ」の「ゼツコウ」に当てる最も適当な漢字はどれか。

- ① 絶交
- ② 絶好
- ③ 絶高
- ④ 絶光

問二 「冬になって空気のカンソウが気になる」の「カンソウ」に当てる最も適当な漢字はどれか。

- ① 乾燥
- ② 乾草
- ③ 爛燥
- ④ 還送

問三 「この言葉は本来の遣い方から乖離している」の「乖離」の読み方はどれか。

- ① てんり
- ② ほくり
- ③ かいり
- ④ せんり

問四 「多事／閑暇」と同じ関係になる最も適当な組み合わせはどれか。

- ① 消滅／入滅
- ② 唐突／突然
- ③ 彼岸／此岸
- ④ 見解／沈黙

問五 次の四字熟語の組み合わせのうちで、すべて漢字が正しいものはどれか。

- ① 異口同音／曖昧模糊／玉石混淆
- ② 周衝狼狽／呵呵大笑／因果応報
- ③ 奇奇怪怪／不平不満／勇猛過敢
- ④ 龍頭蛇尾／捲度重来／三日天下

問六 「いよいよ試合当日だ。僕たちは練習を重ね、（ ）の態勢で本番を迎えた」というとき、（ ）に入る最も適当な言葉はどれか。

- ① 漫然
- ② 瓦全
- ③ 完全
- ④ 万全

問七 「先月初めに起きたあの事件は、あのアスリートの選手生命にとって致命傷となつた」のカタカナを漢字に直したとき、同じ漢字を含むものはどれか。

- ① 難問解決に手恵を絞る
- ② 宝石の価チを知らない
- ③ 待ち合わせにチ刻した
- ④ この作品は美の極チだ

問八 「目の前の橋が危険だと聞いて、二の足を（ ）（ ）の（ ）（ ）に入る最も
適当な言葉はどれか。

- ① 舞う
- ② 脱ぐ
- ③ 踏む
- ④ 引く

問九 「他人への迷惑も考えず、勝手気ままに行動すること」という意味の四字熟語は
どれか。

- ① 因果応報
- ② 傍若無人
- ③ 徹頭徹尾
- ④ 悪口雑言

問一〇 「青息吐息」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 眠っていたり安心していたりするときに出る息のこと
- ② 困っていたり精神的に苦しいときに出るため息のこと
- ③ たくさんの人たちが同じことをするとき息が合うこと
- ④ 若い人たちが初めて共同作業をするときに息が合うこと

問一一 「矢面に立つ」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 批判などを正面から受けること
- ② 早くせよと何度も催促すること
- ③ 悔しくて大声でむせび泣くこと
- ④ 他人にも分かるようにすること

問一 二次の文のうち正しい表現はどれか。

- ① 季節も冬になり、朝、外に出ると霜がもっばらおりている
- ② 彼の複雑な生い立ちについては、ついぞ知ることになった
- ③ 自分の杞憂を信じて、大きなミスに気付くことができた
- ④ 信頼を勝ち得て、彼はグループの牛耳を執るまでになった

問二 「潔」 () 「態度」というとき、送り仮名の正しいものはどれか。

- ① 潔さぎよい
- ② 潔ぎよい
- ③ 潔よい
- ④ 潔い

問三 「砂場につくられた砂の城は非常に完成度が高く、() ()というとき、()に入る最も適当なものはどれか。

- ① あたかも本物の城のようだった
- ② ようやく本物の城のようだった
- ③ なるべく本物の城のようだった
- ④ あいにく本物の城のようだった

問四 「漢検一級に出るような漢字は、とてもではないが() ()というとき、()に入る最も適当なものはどれか。

- ① 書けない
- ② 書けれない
- ③ 書けられない
- ④ 書けれれない

問一六 生徒が先生にAとBのどちらを選ぶか聞く場面で「先生はどちらに（ ）
ますか」というとき、（ ）に入る最も適当なものほどれか。

- ① し
- ② いたし
- ③ なさい
- ④ しておき

問一七 部下が上司に「A部長、今日の昼食は何を（ ）
に入る最も適当なものほどれか。」（ますか」というとき、（ ）

- ① 食べ
- ② 召し上がり
- ③ 頂戴し
- ④ 申し上げ

問一八 電話にて、「私は明日の十時に、そちらに（ ）
いたします」というとき、（ ）に入る最も適当なものほどれか。

- ① 拝見し
- ② お待ちし
- ③ うかがい
- ④ お会いになり

問一九 「泰然自若」とほぼ同じ意味を持つ四字熟語ほどれか。

- ① 用意周到
- ② 曖昧模糊
- ③ 冷静沈着
- ④ 行雲流水

問二〇 「食指が動く」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 興味をそそられること
- ② 好物ばかり食べること
- ③ 大して役に立たないこと
- ④ 手先が疎かになること

問二一 「破竹の勢い」の使い方として最も適当なものはどれか。

- ① 来年のことを今から言うだなんて「破竹の勢い」みたいだ
- ② 今年の風邪は感染力が強い。それこそ「破竹の勢い」だ
- ③ いつも「破竹の勢い」を心がけて生活を送りたいと思う
- ④ このチームの連勝記録は凄い。まさしく「破竹の勢い」だ

問二二 「金字塔」の使い方として最も適当なものはどれか。

- ① 京都にある金字塔は室町時代に建造されたと言われる
- ② 彼の記録は今でも金字塔として語り継がれている
- ③ この活躍で僕は金字塔に登り詰めることになった
- ④ 仮に嫌なことが続いても人生に一度は金字塔がある

問二三 「イノベーション」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 日程調整
- ② 技術革新
- ③ 重要事項
- ④ 費用削減

問二四 「イニシアチブ」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① 肯定論
- ② 妄信的
- ③ 意欲作
- ④ 主導権

問二五 「相乗効果」の意味として最も適当なものはどれか。

- ① トートロジー
- ② エレジー
- ③ シナジー
- ④ アナロジー

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。解答は問いの選択肢①～④から選び、記号を解答用紙に記入しなさい。

仕事にも、あらゆる技術と同じく、そのこつがあり、それをのみこめば、仕事はずっと楽になる。仕事をする気になることだけでなく、仕事が出来るということも、決して簡単なことではないが、多くの人はそれを知らない。

障害にうちかつたための第一歩は、その障害を知ることである。仕事ができるのを妨げるのは、A主として怠惰である。ひとは誰でも生まれつき怠惰なものだ。感覚的に受動的な通常の状態からぬけ出すためには、常に努力を必要とする。善事にたいして怠惰であるということが、われわれの本来の根本的な欠点である。それだから、生まれつき働き好きな人間などありはしない。その性質や気質の上から、いくぶん活潑な者があるだけである。最も活潑な人でも、その天性に従うならば、仕事よりもほかのことで楽しむ方を喜ぶ。勤勉は、B感覚的な怠惰よりも一層強い動機がなければ生まれるものではない。そしてこの動機には、常に二種類ある。低い方の動機は、欲情、とくに名誉心や食欲、わけても生活維持の必要、などである。高い方の動機は、仕事そのものに対する・あるいはその人々のために仕事をしなければならぬその人々に対する・愛や責任感情で

ある。この高尚な動機は、より多くの持続性があつて、必ずしも結果にCコウデイしな
いという特質をもつ。だから、失敗しても飽きていやになつたり、成功しても満足して
熱意を失つたりすることがない。そういうわけで、野心家や貪欲な者は、なるほど時
には非常に勤勉であるが、しかし終始かわらず規則的に仕事を進めていくことは稀である。
彼等はほとんど常に、他人はかまわずただ自分自身にさえ、D本当の仕事と同様の都合
のよい結果が得られるならば、仕事の外見だけで十分満足するのである。商工業の仕事
の一部分、またE遺憾ながら学問や芸術の仕事の一部分が、今日明らかにFこうした性
格をおびている。だから、たとえば今、社会に出て行く青年に最初の忠告を与えようと
すれば、まず次ぎのようなものにならう。諸君は、ある事柄、またある特定の人々に対
する愛と義務感情から働きなさい。何らかの人類社会の大問題に参加するがよい。たと
えば、諸民族の政治的解放、キリスト教の伝道、放置されている下層階級の向上、飲酒
の習慣の廃止、またGわが田に水を引くようだが、国際間の永久平和の確立、社会改革、
選挙法の改良、刑罰および刑務所の改善など、今日このような目的は実にありあまるほ
どあるのであるが、諸君もそのいずれかに参加するがいい。そうすれば、諸君は、最も
手軽に、絶えず外から働きかける刺激が得られ、また最初の間はとくに大切な仕事仲間
が得られるであらう。今日は、文明諸国民の間において、このような進歩のいずれかの
陣営に積極的に参加しない青年が、男女を問わず、一人でもあつてはならないのである。
早くから自分自身をこえて、自分だけのために生活しないということが、青年を向上さ
せ、強健にして、事に屈せぬ力を与える唯一の道である。利己主義は常に一つの弱点で
あり、ただHかかずの弱点を生みだすのみである。

つぎに怠惰をおさえて仕事に向わせるもつとも効果的な手段として役立つのは、習慣
の大きな力である。普通にはただわれわれの肉体的性質にのみ役立っているこの強大な
力を、また同様に精神的方面にも役立てていけないわけがあるうか。われわれは実際、
怠惰、逸楽、浪費、無節度、I吝嗇などに慣れると同様に、また勤勉、節制、儉約、正
直、寛大の習慣をも養うことができる。そして、ここで言い添えておきたいのは、どん
な人間の美德も、それがまだすつかり習慣となつてしまわない限り、たしかにわが物と
はいえないということである。だから、徐々に勤勉の習慣を養うならば、怠惰の抵抗は
しだいに弱まり、ついには勤労の生活が欠くことのできないものになる。そうなれば、
もうわれわれは人生における普通の困難の大部分を免れたも同然である。

さてここに、われわれが習慣的な勤勉を身につけるのを容易にする二三の、ちよつと
したこつがある。それは次ぎのようなものである。

まず何よりも肝心なのは、思いきつてやり始めることである。仕事の机にすわつて、
心を仕事に向けるという決心が、結局一番むずかしいことなのだ。一度ペンをとつて最
初の一線を引くか、あるいは鉤くわを握つて一打ちするかすれば、それでもう事柄はずつ
と容易になつているのである。ところが、ある人たちは、始めるのにいつも何かが足り

なくて、ただ準備ばかりして、なかなか仕事にかからない。そしていよいよ必要に迫られると、今度は時間の不足から焦燥感におちいり、精神的だけでなく、ときには肉体的にさえ発熱して、それがまた仕事の妨げになるのである。

また他の人たちは、特別な感興のわくのを待つが、しかし感興は、仕事に伴って、またその最中に、最もわきやすいものなのだ。仕事は、それをやっているうちに、まえて考えたのとは違ったものになってくるのが普通であり、また休息している時には、働いている最中のように充実した、ときにはまったく種類の違った着想を得るということはない。これは（少なくとも著者にとっては）一つの経験的事実である。だから、大切なのは、事をのばさないこと、また、からだの調子や、気の向かないことなどをすぐに口実にしたりせずに、J毎日一定の適当な時間を仕事にささげることである。

(中 略)

精神的な創造的な仕事をするのに、仕事の区分や、あるいはそれ以上に序論のために、時間と仕事の興味とを失っている人がきわめて多い。あまりに凝った、意味深げな、また一体にあまりに深く立ちいった序論というものは、普通、すこしも目的にそわず、かえって後段に述べるはずのものを前もって語ってしまうという不都合を生ずるものであるが、それはともかくとして、序論や表題は最後に作れというのが、誰にでもあてはまる適当な忠告である。そうすれば通常、それらはひとりでに出来てくるものだ。序論的なものはすべて後廻しにして、自分の実際に最もよく知っている本論から始めれば、ずつと楽に仕事を始めることができる。それと同じ理由からして、まずK序文や、また多くの場合第一章をもぬかして読む方が、書物はずつと読みやすい。少なくとも著者は、序文は決して最初に読まないことにしているが、そして、本文を読み終わったのちにそれにざつと目を通してみても、そのために損をしたと思つたことはまだ一度もないといつていい。もつとも、中には序文が一番いいという書物もないわけではないが、しかし、そんな書物は総じてあまり読む価値のあるものではない。

なおわれわれはさらに一步を進めて、こう言つてさしつかえないであろう。すなわち、すべて（序論と本論との別なく）諸君にとつてもつとも容易なものから始めたまえ、ともかくも始めることだ、と。こうすれば完全に体系的にやらないためにあるいは仕事の順序の上で廻り道になるかも知れないが、その欠点は時間が得られるということ償つて余りあるくらいである。

以上のことと関連して、次ぎの二つの点が明らかになる。第一に、「あすのことを思ひ煩うな。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。」(マタイによる福音書六の三四)人間は想像力という危険な賜物を神からささずかっているが、これはわれわれの實力をこえた、はるかに広い活動範囲をもっている。想像力はわれわれの計画する仕事の全部を、なしとげ得るはずのものとして、一時に目の前に置いてみせるが、人間の力はそれらをつぎつぎに一つ一つやりとげて行くことしかできない。そこで、この目的のために、常に元氣を新たにしていかなければならぬ。だから、いつもただ、今日のために

働くという習慣をつくるがよい。明日はひとりでやって来る、そして、それと共に明日の力もまた来るのである。

第二の点はこうである。もちろん仕事は、特に精神的な仕事はなおさら、丁寧にすべきである。が、しかし、何一つ言いおとさず、読み残さぬというように、全部を尽そうと思つてはならない。そのようなことは今日、もはや誰の力にも及ばぬことである。一番よいやり方は、比較的せまい範囲を完全に仕上げ、そのほかの広い範囲については本質的な要点だけに力を注ぐことである。あまりに多くを望む者は、今日では、あまり成績のあがらないのが普通である。

よく働くには、元氣と感興とがなくなったら、それ以上M（Miserable）しいて働き続けることが大切である。もつとも、最初はあまり感興がわなくても始めねばならぬ———そうしたなれば、巔てんから始めようがない———、しかし、仕事の結果、ある程度の疲れが出てきたら、さつそく中止すべきである。が、その場合に、決して仕事そのものをやめてしまふ必要はない。通常その特定の仕事だけを中止すればよい。というのは、仕事を換えることによつて、必要な休息と同じくらいに元氣が回復するものだからである。われわれの天性にこのような適応性がなかったら、おそらく仕事は大して出来ないであらう。

その反対に、多く働くためには、力を節約しなければならぬ。そしてこれを実行するには、とくに無益な活動に時間を費さない心掛けが必要である。われわれが無益な活動のために、どれだけ多くの仕事の興味と精力とをそがれているかは、ちよつと口に言えないほどだ。まず第一に挙げねばならないのは、新聞を読みすぎることに、第二に、必要な会合や政治活動、とりわけ「カフェー政談」という名で広く知られているような、くだらぬ政治活動である。実に多くの人が、たとえば朝の一番いい仕事の時間を新聞を読むことで始め、また同じく晩は晩で、必ず何かの会や社交クラブや、時としては賭博のテーブルで、その日を終えるというようなことをやっている。彼等が毎朝、一つの新聞を隅から隅まで読むとか、いくつかの新聞に目を通すとかして、そのために翌日まで一体どれほどの精神的利益を持ちつづけるかは、誰も正確に言うことができない。しかし、彼等は大抵こうして新聞を読んだあと何となく仕事にたいする興味を失い、手もとにほかの新聞があればそれを手にとることだけは確かである。

多く仕事をしようとする人は、N（Nervous）精神的雑用を、なお言い添えてよいなら肉体的雑用をも、注意して避けねばならない。そして真にやるべき仕事のために、精力を充分たくわえておくべきである。

最後に、精神的な仕事を容易にする最も有効な、とつておきの方法が一つある。それは繰り返かえすこと、言い換えれば、いくどもやり直すことである。精神的な仕事はほとんどすべてが、最初はただその輪郭がつかめるだけであり、二度目に手がけて初めてその細部が見えてきて、これに対する理解も一層明白になり、精密になるのが常である。だから、〇本当の勤勉は、現代のある有名な著述家が言ったように「ただ休む暇なく働

き続けることではなく、頭の中の原型を目に見える形に完全に表現しようという熱望をもつて仕事に没頭することである。普通に言われる勤勉、すなわち、相当大きな材料を征服して、一定の期間内に目に見えてこれをはかどらせようとする骨折りは、むしろただ当たり前の仕事の前提にすぎず、あの常に精励してやむことを知らぬ、より高い精神的な勤勉にくらべればはるかに及ばぬものである。」

われわれはこれ以上によくこの思想を表現するすべを知らない。働きをこのように解釈すれば、われわれがこの章の初めに述べた^注最後の危惧は事実上消えうせて、仕事の連続性は成立することになる。そして、実にこの連続性こそ、本当の働きのまぎれもない理想なのである。

一度、この、仕事に没頭するという本当の勤勉を知れば、ひとの精神は、働き続けてやまないものである。そしてしばしば、このような(あまり長すぎない)休息ののちに、知らぬ間に仕事がかどつて見えるのを見るのは、まったく不思議である。すべてのものが、まるでひとりでのように明瞭になってきて、多くの難点は突然解決されたように見えてくる。最初頭にたくわえておいた思想はおのずから増大して、立体的なすがたをとり、表現力を得てきている。そして、新たに始める仕事は、今度はまるで、その休息の間にわれわれの力を借りず自然に成熟したものを、骨折りなしに刈り入れるかのように思われることさえ珍しくない。

Pこれが、すなわち、仕事の報酬なのである。このほかになお、ひとが正当にもしばしば挙げる働きの徳は、働く人だけが真に楽しみと休養の味わいを知りうることである。先に働いていない休息は、食欲のない食事と同じく楽しみのないものだ。最も愉快な、最も報いられることの多い、その上最も安価な、最もよい時間消費法は、常に仕事である。(カール・ヒルティ 草間平作訳「仕事の上手な仕方」より)

(注) この問題文の前に「働きと休息とが対立物だとすれば、事実上、この社会の(勤労をいとう)病気はどうていなおる見込みはないであろう」と言う一文がある。

問一 傍線部A「主として怠惰である」とあるが、人は何故「怠惰」になる(あるいは怠惰である)と筆者は考えるのか。筆者の考えにならないものを選べ。

- ① 人は生来怠惰なものだから
- ② 愛や責任感情に欠けるから
- ③ 生活上の必要を感じないから
- ④ 活動的な気質を持たないから

問二 傍線部B「感覚的な怠惰よりも一層強い動機」の性質はどのようなものか。最も適当なものを選べ。

- ① 自覚的なもの
- ② 教育的なもの
- ③ 習慣的なもの
- ④ 気質的なもの

問三 傍線部C「コウデイ」を漢字二字で書け。

問四 傍線部D「本当の仕事」とはここではどんな仕事をさしているのか。最も適当なものを選べ。

- ① 自覚的で精神的な要求に基づく仕事
- ② 飲酒の習慣の根絶のために働く仕事
- ③ 純粋な感興に後押しされて行う仕事
- ④ 習慣の力を借りて持続的に行う仕事

問五 傍線部E「遺憾ながら」と断りを入れるの何故か。最も適当なものを選べ。

- ① 名誉心や食欲から着手する仕事では途中で熱意を失うことが多いから
- ② 仕事のため・人のためにする仕事は高尚な動機とは考えられないから
- ③ 学問・芸術は本来真理追究・理想美実現を内的動機としているものだから
- ④ 学問を生活手段と考えるのは名誉を求めて芸術に向うのと同断だから

問六 傍線部F「こうした性格」とは何か。最も適当なものを選べ。

- ① 高い方の動機に見られる持続性
- ② 低い方の動機に見られる直接的な刺激
- ③ 都合のよい結果が得られるならば仕事の外見だけで十分満足する傾向
- ④ 高い動機から生れる事業継続の熱意が事の成否に関わらず持続する傾向

問七 傍線部G「わが田に水を引くようだが」と筆者が断りを入れる理由は何と推測できるか。最も適当なものを選べ。

- ① 飲酒の廃止に著者はこれまで積極的に関わってきたという自負があるから
- ② キリスト教の伝道は人類社会の大問題ではないと考える人が存在するから
- ③ 筆者自身が国際間の平和確立に関心を持ちそのために活動をしてきたから
- ④ 青年に語る著者の言葉遣いが荒く仰々しく聞こえると著者自身が感じたから

問八 利己主義が生み出す傍線部H「かずかずの弱点」と考えられるもののうち、直接本文と関係しないものはどれか。最も適当なものを選べ。

- ① 向上心の衰弱
- ② 不屈の熱意の喪失
- ③ 時間不足が生む焦燥感
- ④ 外的刺激からの隔絶

問九 傍線部I「吝嗇」の読み方をカタカナで記せ。

問一〇 傍線部J「毎日一定の適当な時間を仕事にささげること」が大切なのは何故か。最も適当なものを選べ。

- ① 思いきってやり始めるきっかけを作る最もよい方法であるから
- ② 準備を始める口実が心に侵入するのを防ぐよい方法であるから
- ③ 毎日一定の時間休みなく働くことで驚くほど仕事がかどるから
- ④ 大抵の場合感興は仕事の最中に徐々に生まれてくるものだから

問一一 傍線部K「序文や、また多くの場合第一章をもぬかして読む方が、書物はずつと読みやすい」と著者が考えるのは何故か。最も適当なものを選べ。

- ① 著者の最も得意で熟知する中心部分から読むことになるから
- ② 序論と第一章に核心的なことが書かれていることが多いから
- ③ 一般的に著者の思想は章が進むに従って高調するものだから
- ④ 最良の序文を持つ書物の第一章が最良である書物はないから

問一二 傍線部L「想像力という危険な賜物」とあるが、どうして「危険」なのか。最も適当なものを選べ。

- ① 将来起こるかもしれない異常な事態を現実的に予測させるから
- ② 一時にすべきこととして事業全体の計画を提示する力があるから
- ③ 今日と同じ元気をもって明日もまた仕事をする必要があるから
- ④ 一日の労苦はその日一日だけ終わらずこの先も長く続くものだから

問一三 傍線部M「しいて働き続けないことが大切である」とあるが、この言葉の真意は何か。最も適当なものを選べ。

- ① 人との政談で精神の活動は保たれるから元気が失せたら当面の仕事を中止せよ
- ② 感興のわからない状態で仕事を続けるのは休息すると同様精神の休息になる
- ③ 感興が消え失せた現在の仕事を中止し他の新しい仕事に取り掛かるべきだ
- ④ 特定の仕事を止めても精神的活動が続いていれば仕事は続いていることになる

問一四 傍線部N「精神的雑用」にあたらないと著者が考えていると推測できるものはどれか。最も適当なものを選べ。

- ① カフェー政談
- ② 社会改革運動
- ③ 社交クラブ
- ④ 新聞を読むこと

問一五 傍線部O「本当の勤勉」はどのように言い換えることができるか。最も適当なものとはどれか。最も適当なものを選べ。

- ① ある仕事の完成への熱意をもって精神的活動に打ち込むこと
- ② 仕事の輪郭が見えるまで繰り返し同じ仕事に取り組むこと
- ③ 感興の持続に必要な休息を適度にとりながら仕事を続けること
- ④ 読み残し言い残しがないように丹念に仕事に取り組むこと

問一六 傍線部P「これ」とは何をさすのか。最も適当なものを選べ。

- ① 著者の思想的成長
- ② 独創的な着想と展開
- ③ 労働の喜悦と休息の享受
- ④ 仕事の自発的な進捗

問一七 仕事の仕方についての著者の助言に含まれないものはどれか。最も適当なものを選べ。

- ① 今日の仕事に集中せよ
- ② 感興が失せたら休息をとれ
- ③ 習慣の強力な力を利用せよ
- ④ 手を着けやすいものから始めよ

三 二の題文「仕事の上手な仕方」には仕事の能率を上げる働き方の助言がいくつか書かれています。その助言の中から二点（今それを助言A及び助言Bと呼ぶ）選んで、助言Aと助言Bとの関連を考えて、「第一の関連は、……という点である」「次に第二の関連は、……という点である」というように、その関連を少なくとも二点の視点から論じなさい。字数は全部で一〇〇〇字程度です。（解答は原稿用紙に記入のこと）